

報告

濟州島のタカラガイ（ハナビラダカラ）のついた土産物

A Souvenir with Cowry(*Cypraea annulus*) Sold in Jeju Island

安 木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

2015年3月に筆者は濟州島の土産物屋でトルハルバン風の人形とハナビラダカラ *Cypraea annulus* があしらわれたキーホルダーを買った。島の産品を土産物とすれば島の製造業も活性化するのだろうが、観光業に特化してミカン、生鮮野菜、天然水以外は外部からの供給に頼らざるをえなくするような開発政策は現代の植民地主義だと言えるだろう。濟州島で売られているハナビラダカラは濟州島付近で採集されることはなく、南国情緒を押し付けられ観光業への依存を強制された島の象徴のように思えた。

キーワード：韓国、濟州島、タカラガイ、観光、貝貨

はじめに

写真は2015年3月に筆者が濟州島の土産物屋で買ったトルハルバン風の人形とハナビラダカラ *Cypraea annulus* があしらわれたキーホルダーである。

タカラガイ *Cypraeidae* は収集の対象としてだけでなく、考古学、民俗学、文化人類学、そして貨幣史といった学問分野においても興味の尽きない研究対象である。現在でも東西アフリカ、イスラーム圏、チベット仏教徒の多い地域などでキイロダカラ *Cypraea moneta* やハナビラダカラが装飾品として用いられる。また、いわゆる「南国リゾート」ではハナビラダカラの付いた土産物がさかんに売られている。現生人類 *Homo sapiens* のタカラガイ選好は時代や地域を超えた普遍性を持つようである。

写真 濟州島のトルハルバン風人形とハナビラダカラのついたキーホルダー



1. 濟州島と観光

濟州島は周囲290km、南北41km、東西73kmの楕円形の島で、中央部にそびえる漢拏山（標高1,950m）の噴火によってできた火山島である。漢拏山は活動休止中で、濟州島の各地に溶岩洞窟や「オルム」とよばれる側火山など、特徴的な地形がみられることから、2007年に「濟州火山島と溶岩洞窟群」として、漢拏山、拒文オルムの溶岩洞窟系、城山日出峰のタフコーン（火山灰丘）の3か所が世界自然遺産に登録された。

濟州島は朝鮮半島の南90kmの東シナ海にあり、緯度は九州北部沿岸と同じで、韓国のなかでは温暖な気候だといわれる。濟州島では地中にしみ込んだ雨水が地下水脈をとって海岸近くで湧水となって海に直接そそぐことから、河川が発達しないこともあって稲作が振るわず、またかつて集落は湧水のある海岸に散在していた。

濟州島の伝統的な生業は若干の農業と、海女に代表される漁労、そして島中央部での牧畜である。現在ではボーリングして地下水を利用できるため、島内各地でミカンの栽培がさかんにおこなわれるようになったが、今も水田はあまりみられない。

韓国政府は2006年に濟州島とその付属島嶼を濟州特別自治道とし、濟州市と西帰浦市の2つの行政区画に統合した。濟州道では観光業を中心とする経済政策が推し進められ、韓国本土からだけでなく、中国、日本、東南アジアなど外国からも含めて年間1,000万人を超える観光客の訪れる「リゾート・アイランド」となっている。

特に中国からの観光客は年間200万人を優に超えている。濟州島は上海から飛行機で45分と中国から地理的にも近いが、韓国政府が中国人に対し、濟州島経由の入国であれば査証申請を免除するという政策が中国人旅行者の激増をもたらしている¹のである。

濟州島は「リゾート・アイランド」として、免税措置、査証免除、賭博の合法化、外国人への永住権の付与要件の緩和など、多くの観光振興策が講じられてお

1 訪濟州道外国人旅行者数は2004年の33万人から2014年には333万人と10倍になった。外国人旅行者の8割が中国人である（『朝鮮日報（日本語版）』、2015年5月13日付）。

り、いわゆる「観光特区」となっている²。しかしながら、近年では韓国本土の政府や企業、中国企業による強引な開発と物価上昇に対し、地元住民から反発の声も聞かれる。

2. トルハルバンとハナビラダカラ

本稿で取り上げるキーホルダーに付いているトルハルバンとは「石おじさん」の意味で、濟州島の民家の門前に置かれていた立像である。もともと濟州島にはたくさんトルハルバンがあったが、第二次世界大戦後に島から流出し、現在では小さな玄武岩製トルハルバンが土産物として売られている。このキーホルダーに付いている黒い人形はトルハルバンをイメージしたものである。「土産は地名を買うこと」と言われるように、土産物にはその地名やその土地を代表するものが付加される場合が多く³、このキーホルダーにはJeju（濟州のローマ字表記）の文字とトルハルバンが付いている。

次にハナビラダカラについて。日本人用土産物店の販売員の女性に、なぜ土産物店は日本人用と中国人用に分かれているのか尋ねたところ、「その方がいいでしょう。」との返事だった。キーホルダーにハナビラダカラが付いている理由を聞くと、知らないとのことだった。日本では昔からタカラガイを子安貝といって安産のお守りにしていたと説明すると、これからそういう風に言って売ると喜んでくれた。

正確に言えば、子安貝はハチジョウダカラ *Mauritia mauritiana* のような、ハナビラダカラより大型のタカラガイを指す。日本では縄文時代からタカラガイは珍重され流通していた⁴。

キイロダカラやハナビラダカラは世界各地で貨幣や装飾品として用いられてき

2 濟州島における観光政策については、新井直樹（2013）「韓国・濟州特別自治道の国際観光戦略」『都市政策研究』、福岡アジア都市研究所、14、39頁～49頁、および金蘭正（2013）「韓国濟州道における「世界7大自然景観」選定への取り組み」『鈴鹿国際大学紀要』、19、127頁～134頁を参照。

3 藤塚悦司（2018）「観光貝細工」『民具マンスリー』、51（6・7）、39頁～41頁。

4 忍澤成視（2018）「縄文時代のタカラガイ加工品：その特異な扱いについて」『民具マンスリー』、51（6・7）、4頁～9頁。

た。現在でもハナビラダカラの付いた土産物はおもにフィリピンで作られ、沖縄、グアム、ハワイなどで売られている。また、筆者が2013年にモンゴル・ウランバートルのガンダン寺を訪れた際、ハナビラダカラの数珠などが店先に並んでいた。⁵

濟州島は15世紀まで耽羅国と呼ばれる半独立国で、百濟、新羅、高麗といった朝鮮半島の国々に服属していたが、13～14世紀には元朝（モンゴル帝国）の支配下にあった。元朝の統治下で「牧胡」（牧民）が馬と共に移住しカアンの牧地が置かれた。つまり濟州島民は牧胡の子孫でもある。⁶現在でも島の中心部には国営濟州馬放牧地がありモンゴル馬（朝鮮語でチョランマル）がいる。また、常設のサーカス小屋があり、ウランバートルから来た馬のサーカス団が観光客向けに公演している。ただし、馬のサーカス団をモンゴルで見たことはない。

島の民俗村には古民家が再現され、モンゴル遊牧民の移動式住居ゲルの形をした茅葺屋根の家がある。民俗村のガイドによると、古民家が残されたのはモンゴルの伝統を保存するためではなく、ソウルの権力者が茅葺屋根に自生する冬虫夏草を欲したためだという。

キイロダカラやハナビラダカラはモンゴル高原では13世紀ごろのキリスト教徒の墓から埋葬品として出土し、またモンゴル統治下の雲南やルーシ（モスクワ周辺やウクライナ中西部、ベラルーシ）では貨幣として使われていた。⁷

もちろん、現在濟州島で売られているタカラガイ付き土産物とモンゴル帝国との関係はなく、「南の島」らしさをタカラガイで表現しているのであろう。すでに述べたように、濟州島は韓国では珍しくミカンの栽培が可能で、朝鮮半島よりも温暖であり、韓国人にとって濟州島は「南の島」である。⁸とはいえ、筆者が

5 安木新一郎（2018）「穿孔されたハナビラダカラ」『京都経済短期大学論集』、26（1）、31頁～33頁。

6 牧胡の中には石のような漢風の姓をもつ者もいて（大葉昇一（1999）「元・明初の耽羅（濟州島）」『昭和女子大学文化研究』、3、55頁～67頁）、モンゴル人だけでなくトルコ系や契丹人など漢化した遊牧民の子孫も含まれていたと思われる。しかも元末明初の耽羅島民の中には日本人風の恰好をし日本語を話す人もいて、耽羅国は北東アジアの様々な人々や文化の入り混じった境界領域であった（村井章介（1993）『中世倭人伝』、岩波新書）。

7 安木新一郎（2012）「13世紀後半モンゴル帝国領雲南における貨幣システム」『国際研究論叢』、25(2)、123頁～132頁。

8 司馬遼太郎が街道をゆくシリーズで紹介している。司馬遼太郎（1990）『耽羅紀行』、街

訪れた3月でも雪が降っていて、西日本の太平洋岸に比べると温暖だとはとても言えなかった。

おわりに

世界遺産に指定された火山島に特有の地形、なかでも神話の時代を今に伝える三姓穴（この穴から出てきた3人の男性と日本から来た3人の女性の子孫が耽羅の人の先祖だという伝説がある）、豊富な玄武岩から作られたトルハルバン、耽羅国時代のモンゴルによる統治の名残、海女の文化など、濟州島は観光資源に恵まれた場所である。しかしながら、朴正熙元大統領の石碑を建てるために耽羅時代の遺跡が破壊され、島の歴史とほとんど無関係な「韓流」歴史ドラマのセットが観光の目玉とされ、カジノを建てて外国人観光客を呼び寄せようとするなど、濟州島における観光政策や資本の動きは濟州島の魅力を生かすどころか滅殺しているように思えた。

島の産品を土産物とすれば島の製造業も活性化するのだろうが、観光業に特化してミカン、生鮮野菜、天然水以外は外部からの供給に頼らざるをえなくするような開発政策は現代の植民地主義だと言えるだろう。濟州島で売られているハナビラダカラは濟州島付近で採集されることはなく、南国情緒を押し付けられ観光業への依存を強制された島の象徴のように思えた。

※濟州島視察に同行していただいた松田孝一・大阪国際大学名誉教授に記して感謝申し上げます。言うまでもなく本稿のありうる誤謬はすべて筆者に帰する。

道をゆく 28、朝日新聞出版。

9 2011年末現在、濟州道の海女と海士の数は4,881人で60歳以上が全体の80.4%を占めており、年々減少傾向にある（『朝鮮日報（日本語版）』、2012年2月19日付）。